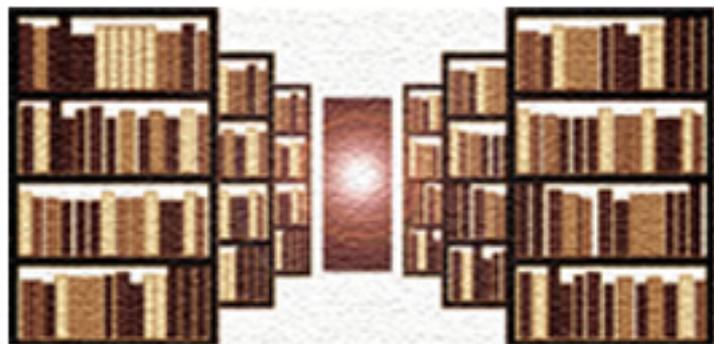


室井先生の書齋



梶崎由梨

Anima Solaris

(1)

古本屋通いを続けていると、時々、どの店へ行っても、同じ客と顔を合わせてしまうことがある。住所が近かったり、お気に入りの古書店が一致している場合は尚更だ。そういう客は、どうかすると、自分と本の好みが似ていたりするので要注意だ。その店に新着の古本が入荷した際、同じ本を狙って、奪い合いになる可能性が高いのだ。

最近おれも、あちこちの店で、ひとりの男と、よく顔を合わせるようになった。そいつはおれと近い年ぐらいで、スポーツ選手のように背が高い。いつも担いでいる緑色のデイパックには、綺麗な翡翠色の鳥の絵が描かれたワッペンが縫いつけられている。鳥の足元には、『Kingfisher』という文字が綴られている。

Kingfisher——カワセミのことだ。

そこでおれは、そいつを『カワセミ男』と呼ぶことにした。手元を観察していると、カワセミ男は、よく、推理小説や探偵小説を買ってゆく。いずれも、質が高いわりには絶版になっている、そのジャンルでは有名な作家の本だ。

カワセミ男は趣味がいい。だから、おれは少し心配だ。

*

初冬の頃、おれは、古書店《しおり書房》を訪れた。《しおり書房》は、昔ながらの、個人経営の古本屋だ。店主の安齋さんは、かつては「古本探偵」の異名をとるほどの古書ハンターだったが、病気で膝を痛めてからは、古書店の経営に専念するようになった。

おれは安齋さんの足代わりだ。あちこちの古本屋をまわって、自分の欲しい本に加えて、安齋さんから頼まれた本を探して歩く。

おれはプロの探偵ではないし、せどり屋でもない。だから、いつも無報酬でそれらの依頼を引き受ける。金を貰って義務的に探すよりも、古本を通じて、本好きの人間と仲良くなることのほうが面白いからだ。

夕刻の店頭に、安齋さんの姿はなかった。

レジには、安齋さんの奥さんが座っているだけだった。

「こんにちは。お邪魔します」

おれが店に入ると、奥さんは値札貼りの手を止めて、笑顔を浮かべた。「あら、いらっしやい」

「ご主人は、どちらに？」

「二階の書庫ですよ。あなたが来たら、あがって貰うように言われてました。遠慮なくどうぞ。わたしは、レジを離れるわけにはゆきませんからね」

「では、お言葉に甘えて」

レジの奥には畳の間が続いている。靴を脱いでそこへあ

がると、座布団の上に、トラ猫のジエイムズが寝そべっていた。客が来たというのに起きあがりもせず、寝ころんだまま、尻尾を二・三度振ってみせた。《よく来たね。まあ、あがりたまえ》と言っているような態度だった。この猫の性格は、飼い主の安齋さんにとてもよく似ている。

狭い階段をのぼり、おれは二階の書庫へ入った。安齋さんと奥さんとおれしか知らない、秘密の書庫へ足を踏み入れた。

異次元書庫は、いつもと変わりなく、よく管理されていた。緑の絨毯からは、本物の植物の香りがほんのりと立ちのぼっている。頑丈な作りの書棚には、著者名別・ジャンル別に並べられた蔵書の数々が並ぶ。本につく害虫を取り除いてくれる《司書蜘蛛》は、八本の長い足を繰り出して、蔵書の隙間を移動していた。

室内は広いが、安齋さんを探し出すのは簡単な筈だった。書庫には、安齋さんが持ち込んだ読書机と椅子が幾つかある。膝の悪い安齋さんは、たいてい、そのいずれかに腰をおろして本を読んでいるのだ。

だが、二つある机のいずれにも、安齋さんの姿はなかった。入り口から一番遠い机の前で、おれは周囲の本棚を見回した。——変だな。ここから奥の書棚はまだ全部カラだし、通ってきたどこかにいるなら、気配を感じる筈なのに。

おれは立ち止まり、耳を澄ました。すると、遠くから、小さな話し声が聞こえてきた。声には、パチツパチツと、硬いプラスチックを弾くような音が混じり込んでいた。独り言ではなく、会話のように聞こえる。

意外だった。奥さんとおれしか知らないこの秘密の書庫を、安齋さんは、誰に喋ったのだろうか。どうしても本好きの仲間には自慢したくなつたのだろうか。あるいは、蔵書管理に困っている友人たちに、一月幾らで貸す契約でもしたのだろうか。

おれは、声のするほうへ向かった。

安齋さんは、ほんのすぐ先にいた。

テーブルを間に挟み、見知らぬ男と向かい合つて座っていた。二人はオセロゲームに熱中していた。先刻から聞こえていたパチパチという音は、オセロの駒をひっくり返す音だったのだ。

男は、安齋さんと同じぐらいの歳に見えた。大きな身体は少々太り気味で、机の縁に接している腹部が苦しそうだ。ベージュ色のスラックスに白いシャツという出で立ちは、特別個性的なわけではなかったが、どことなく妙にレトロな、不思議な雰囲気が漂っていた。丸い鼻の上には黒縁の四角い眼鏡。短く刈り込まれた髪はもうほとんど真っ白だ。どこかで見たことがあるような人物だったが、誰なのかは思い出せなかった。

おれが躊躇していると、安齋さんが気づいて、声をかけてきた。

「やあ来たね。遠慮しないで、こっちへおいで。いや、ゲームはいいんだ。あとで、いくらでもできるから」それから対戦相手に向かって言った。「いいですよ、先生？」「ええ、結構ですよ。それにしてもこれは面白いゲームです。ぼくは囲碁や将棋は苦手ですが、こういうモダンなものなら大歓迎です」

いまどきオセロゲームに感激するなんて変わった人だなあと思いながら、おれは二人の側へ近づいた。見知らぬ男に、ちよつと頭を下げた挨拶をした。

「はじめまして。安齋さんのところでいつもお世話になっています、幸田といいます」

安齋さんが横から付け加えた。「彼は、私の代わりに本を探してくれている人です。先生の作品もたくさん読んでいますし、きつと、お役に立つと思いますよ」

「あ、それは、どうも」

男は、にこにこしながら、おれに言った。「こんなところまで来て自分の読者に会えるとは思わなかったよ。嬉しいね。ありがとう」

ああ、この人、作家なのか。

どんなものを書く人なのだろうと思っていると、安齋さんが続けた。

「幸田くん。こちらは室井先生だ。君のよく知っている、あの室井先生だよ」

「へ？」

おれが意味を理解できずにいると、安齋さんは、にやりと笑った。「本物だよ、幸田くん。この方は『書棚の育て方』の作者、室井龍星先生だ」

「えっ!!」

と叫んで、おれは男の顔をまじまじと見直した。「嘘でしょう?!」

「いや、嘘じゃない」

「そんなこと有り得ないですよ。だって、室井龍星は、確か六十年代に入っただけで亡くなって……」

そこまで言った途端、おれはハタと思い留まった。言うてはいけないことを言ってしまったような気がして、後に続けるつもりだった言葉を、もぐもぐ・ぐにやぐにやと喉の奥へ押し込んだ。

「本当に、室井先生なんですか？」

男は、テーブルに積み上げてあった本の中から、一冊の雑誌を引き抜いた。それは、作家や芸術家の生活を時々特集している雑誌のバックナンバーだった。ページを開くと、男は、そこに載っていた写真を自分の顔の横に持ってきた。微笑を浮かべながら言った。

「ほら。これで、ただのそっくりさんじゃないってことが、

わかって貰えるかな？」

写真は、男が室井龍星本人だということを、充分過ぎるほどに証明していた。

そしておれは、その時になって初めて、この人物を見た時に感じた、あの妙にレトロな雰囲気の正体によく思い至った。男が身につけている服の素材や襟の形、眼鏡のデザイン等が、現代の商品とは微妙に異なっているのだ。

おれは洋服や風俗の専門家ではないから、詳しいことはわからない。だが、古い時代の映画やTVドラマで擦り込まれたイメージが、この男の姿の上に、無意識のうちに重ねられていたのだろう。それゆえの、ひっかかりだったのだ。

それでも、おれは、まだ全てを信じる気にはなれなかった。この書庫が普通の場所ではないといっても、死人が生き返るような奇蹟まで起こると思えなかった。

「本物の室井先生だとしたら、どうやって、ここへいらしたんです？ 先生とぼく達の時代では、四十年以上の開きがある筈ですが——」

「簡単なことだよ。ぼくの書庫にも、そのと同じ扉があるのさ」

男は、書棚の一つを指さした。

その書棚には本を並べる棚がなかった。その代わり、背板に、扉とノブが出現していた。大きさは、人がひとり通れるぐらいのものだ。

いつのまに、こんなものができたのだろうか？ おれは扉に近づき、そいつをじっと観察した。

男は言った。「ぼくの書庫と、安斎さんの書庫。その二つが、その扉を挟んで繋がっているわけだ。嘘だと思ったら、扉を開けてごらん」

おれは、扉のノブに手をかけてみた。ノブは軽やかに回り、扉は難なく開いた。

嘘ではなかった。扉の向こうには、ここと瓜二つの書庫が広がっていた。延々と続く無数の書棚。下草が生えたような緑色の床。天井からふりそそぐ柔らかな白い光……。

「そんな中途半端な見方をしてないで、思い切つて、中へ入ってごらん」

ぼーんと背中を押されて、おれは、向こう側へ転がり落ちた。

扉を通る瞬間、ふいに周囲が暗闇に包まれ足元感覚を失ったので、おれはパニック状態に陥った。尾を引く叫び声をあげながら、おれは闇の中をどこまでも落ち続けた。落下は永遠に続くように思われた。が、その直後、いきなり全身に平衡感覚が戻ってきて、おれは、扉の向こうに見た書庫の床にうずくまっていた。

顔をあげ、周囲を恐々と見回した。

そこは確かに、安斎さんの書庫ではなかった。空気の匂いが違った。床の緑の色が違った。何よりも、ここには、

何十年も使い込まれたような古びた雰囲気は漂っていた。

床には、ところどころに、ヒメジョオンのような小さな白い花がたくさん咲いている。司書蜘蛛の体格は、安齋さんのところのより三倍ぐらい逞しい。書棚はどれもいっぱいだ。見慣れない版型や装幀の専門書・文学全集などがずらりと並んでいる。加えて、今の古書市場に出せば、何十万、何百万と値がつくに違いない和書・洋書が、ぎっしりと詰め込まれていた。

おれの傍らには、いつのまにか、あの男が佇んでいた。「こっちだよ」

男は言い、おれの手を引いて書庫の中を歩き始めた。

おれは引かれるままに、男のあとをついていった。膨大な数の本が、おれたちを見つめていた。そこに満ち満ちている活字の総量を思うと、頭がくらぐらし、体の芯から微熱が広がった。

安齋さんの書庫から出る時と同じように、おれたちは、異次元書庫から外へ出た。

爽やかな畳の匂いが鼻の奥に広がった。

目の前に現れたのは、十畳ほどの和室だった。最近ではあまり見かけなくなつた、正統派の和室だ。

室内には背の低い執筆机があり、貝を形どつた卓上ライトが置いてあつた。机の前には、使い込まれて潰れた座布団が一枚。机の上に乗っているのは、ワープロやノートパ

ソコンではない。大きな升目の原稿用紙と、パーカーの太い万年筆だ。そして、この和室の中にも、所狭しと書籍が積み上げられていた。

何だか、ステレオタイプとも言えるほどに作家でございといった雰囲気を書齋に、おれは、逆に感銘を覚えた。これはある種の装置なのだ。執筆活動という掴みどころのない世界へ没入してゆくために、この男が利用している巧妙な装置のひとつなのだ。

原稿用紙に書かれた筆跡を見て、おれは、この男が、室井龍星に間違いないことを確信した。

おれは、男に向かって、改めて頭を下げた。

「失礼しました。なかなか信じられなかったもので。本当に、本当に、本物の室井龍星先生なんですね？」

「まあ、信じられないのは、無理もないと思うよ」と、室井先生は言った。「ぼくだって、扉の向こうが四十年先の未来に繋がってるなんて、想像もしていなかったからね」「あ、あの、もしよろしかったら、今度、先生のサインを頂けないでしょうか？ 家に何冊か先生の本がありますので、もし差し支えなければ……」

「そんなものでいいならいくらでもしてあげるよ。何冊でも、持って来なさい」

「うわああっ、ありがとうございますっ！」

それからおれは、室井先生と一緒に再び現代へ——安

斎さんの書庫へ戻った。そして、これまでの事情を手短かに聞かされた。

謎の扉は、ふと気づいたら、書庫の中に出現していたらしい。

最初に気づいたのは、室井先生のほうだった。

扉を開けてみて先生は驚き、次には、その向こうへ足を踏み出すべきかどうか、しばらく迷い続けたという。だが、好奇心に勝つことはできなかった。ポケットにアーミーナイフを忍ばせると、心が命じるままに、先生は思い切つて足を踏み出した――。

「……でも、着いた先が、ただの書庫で良かったよ」

と、室井先生は言った。「そこにいたのも怪物なんかじゃなくて、ただの古本屋のおやじさんだったしね。おまけに、ぼくの書斎にあるのと同じ書庫を育てている人だったなんて」

室井先生は、安斎さんの書庫の中を嬉しそうに見回した。「書庫の育て方も上手だね。書棚も空間も理想的な発育を続けている。ツリーをうまく育てられない人には、この書庫は絶対に手に入らないし、ツリーが枯れば、この空間も縮んで消えてしまうんだよ」

安斎さんは答えた。「今は、やたらと出版点数の多い時代ですからね。ツリーに食わせる活字には困りません。少なくとも、わたしが生きている間は大丈夫な筈です。とこ

ろで、幸田くん」

「はい」

「今日、君を呼んだのは、室井先生に会わせて、サインをおねだりして貰うためじゃないんだ。君の本探しの才能を、先生のために発揮して貰いたいんだよ」

「室井先生のためなら、どんなことだってやりますよ。で、何を探せばいいんです？」

『赤砂の都市』という作品を知っているだろうか？ 室井先生の最後の作品だ。これには二種類の本がある。途中までしか原稿の揃っていない《オリジナル版》と、結末部分が別の作家によって書き足された《新月版》だ。今回探して欲しいのは、《新月版》のほうだ。初刷しか存在しない《新月版》『赤砂の都市』を、早急に、見つけ出して欲しいんだ」

『赤砂の都市』は、火星を舞台にした空想冒険小説だ。

はるか昔、火星で文明を築いていた火星人たちが、惑星環境の変化によって、文明存続の危機にさらされる。火星人たちは智慧を絞り、生き残りのために様々な道を模索する。だが、荒廃の進んだ環境に適応して、惑星上に、危険な変異種が誕生してしまう。その生物は、元は火星人の家畜だったのだが、変異によって知性と凶暴性を獲得し、火星人類を食糧とみなして、次々と襲い始めるのだ。物語は、様々な立場にいる火星人が、環境の異常を改善させるべく奮闘したり、変異生命体との激闘を繰り広げる様子が、三人称多視点の手法でスリリングに描かれてゆく。

火星に向けて、NASAのバイキング1号が飛び立ったのが一九七五年。その二十年前に着想されたこの小説は、冒険活劇物語の一種であって、科学的なアイデアを云々する類の作品ではない。そもそも、室井龍星はSF作家ではないのだ。だからこの作品も、仕組みのよくわからない無茶苦茶な兵器が出てきたり、ずいぶん強引な展開もあるのだが、室井龍星が書くときとそういったアラがあまり気にならず、何だか、妙に楽しめてしまう。空想の世界にしか存在しない「純白の火星花」に覆い尽くされた大地で、様々な性格の火星人たちが、衝突し、和解し、騙し合ったり、

助け合ったり、新しい価値観に目覚めて苦難に立ち向かったりしてゆく様には、胸がすぐような爽快感と、理屈拔きの面白さがある。

だが、『赤砂の都市』は、最後まで完結しなかった。作者の室井龍星が、執筆中に、心不全で急逝したからだ。五十七歳の若さだった。

室井龍星は死ぬまで現役作家だったので、この作品も、彼の死後、すぐに出版されることになった。その際、未完成的のままのオリジナル版ではなく、別の作家が物語の結末を書き加えた「別ヴァージョン」が、先行発売されることになった。それが安齋さんの言う《新月版》だ。

書いたのは、のむらしんげつ野村新月という人物だ。室井龍星に師事していた若手作家で、弟子達の中では最もデビューが早く、室井龍星との交流も活発だった。

師匠の死後、新月は遺族の了解を得て、師の遺した構想ノートや資料を詳しく調べあげた。そして、「室井龍星ならこのような結末を書いたのではないか」という大胆な予測の元に、新月版『赤砂の都市』を完結させた。《新月版》発刊のゴーサインを出したのは、『赤砂の都市』の出版に関して室井龍星と約束を交わしていた、清論社だった。

出版社の思惑通り《新月版》はよく売れた。室井龍星の遺作を読みみたいと思う読者や、新月がどのような結末をつけたのか知りたいと思う読者が、一斉に飛びついたからだ。

だが、本が売れたわりには《新月版》は不評だった。「室井龍星らしさの感じられないラストだ」という批判的な意見が、一部の評論家や読者の間から、湧き起こったからだ。

曰く、

『室井龍星なら、こんな、もの侘びしい終わり方にはしなかつただろう。必ず、ハッピーエンドで締めくくった筈だ』
『……つまり野村新月は、室井龍星の作品を完成させるという道筋から外れて、自分の作品を書いてしまったのだ。悪い意味で、ファンの期待を裏切ってしまったのである』
等々。

新月の書いたラストは、火星人たちが変異生命体を滅ぼすことに成功したものの、結局は環境の激変に耐えられず、自分たちの身体を改造して外界に適応することを選ぶ——というものだった。つまり火星人たちは、今まで闘ってきた相手と同様に、自らが変異種になることを選んだのだ。あるものは砂漠に、あるものは極地の氷の海で生きられる姿へと変化した。急速に乾燥化と寒冷化の進む大地と海の下で、火星人たちは、文明の復活を夢見ながら長い眠りにつく。再生までの時を刻む、永久時計の音を耳にしながら——。

といった感じの、他の室井作品にはないような、全体的に暗い雰囲気の結果だったのだ。

批判の勢いが強かったせいも、結局、清論社は《新月版》の二刷以降を出さなかった。元々、話題作りのために発刊したようなところもあり、モトは充分に取れたと判断したのかもしれない。

ほどなく、清論社は、室井龍星が書いた原稿のみで構成された《オリジナル版》を発刊する。結末のない、文字通り「絶筆状態」のこの本は、何度も版を重ね、現在、室井龍星の『赤砂の都市』と言えば、この本のことを指す。新月自身は、その後もしばらく自分のオリジナル作品を発表し続けていたが、いつのまにか文壇から姿を消した。評論家の中には、この時の出来事がショックで筆を折ったのだと言う者もいるが、真相は定かではない。

「でも、そんなに珍しい本なら、どうして、安齋さんがお持ちじゃないんですか？」

おれは不思議に思っただけだ。「室井龍星のファンなら、絶対に、リアルタイムで買っている類の本でしょう？ 清論社は大手の出版社ですし、初刷だけでも一万部は」

「そのへんは、ちょっととした事情があつてな」

安齋さんは、あまり話したくなさそうな表情で、苦笑いを浮かべた。「持つてはいたんだが、昔、金に困っていた時に、そいつを高く買うという人がいてね——。まあ、他でもまだ手に入るだろうと思って手放したのが、間違い

だったんだな。それ以来、一度手に入れた本は、絶対に手放さなくなったんだがね」

「……ようするに、目先の利益に、目がくらんだわけですか」

「あんまり責めんでくれよ。古本屋とはいえ、店を一軒経営するのは、大変なことなんだぞ」

「わかりました。じゃあ、とにかく、その《新月版》を探し出せばいいわけですね。でも、どうして室井先生が、その本をご入り用なんですか?」

「ぼくは、新月くんが『赤砂の都市』の結末をどのように描いたのか知りたいんだ」と、室井先生は言った。「世間で言われたように本当に酷い出来だったのか。それとも、ぼくが許容できる範囲のものなのか」

「それなら、安齋さんに、オチを教えて貰うだけでいいんじゃないんですか?」

「いや、そうではなくて、小説の形として知りたい。オチの内容だけではなくて、文体・構成・小説としての要素が、プロ作家の仕事として、全うされているかどうかを確認したいんだ」

「なぜですか?」

「それによって、元の時代へ帰ってからの行動を変えようと思うからさ。もし、新月くんの書いた結末がぼくにも納得できるものだったら、ぼくは自分の時代へ戻った時に、彼のた

めに、可能な限り資料と草稿を遺してやろうと思う。完璧な結末を書いて貰うための手がかりをね。だが、もし彼が、高名心からいい加減なものを書いただけなら——ぼくは一切の資料を、死ぬ前に処分してしまうつもりだ。誰にも続きなど書けないように、今書いている原稿も草稿も全て焼き捨てる」

「そんなことをするぐらいなら、先生が、ご自分の手で『赤砂の都市』を完結させればいいじゃありませんか！こちら側で書き上げて先生の時代へ持ってゆけば、先生は、生きている間に、完結した本を出版できるでしょう？」

「残念だが、それは不可能なんだ。この扉は、ぼくの身体は通すが、他のものは通してくれない。何度も試してみただが、書物も原稿用紙も通してくれないんだ。持ち出したつもりでも手の中から消えてしまうんだよ。ひよつとしたら今のぼくの体も、本当はここに実体としてあるわけではなくて、非物質的な存在として、過去から投影されているだけなのかもしれないな。幻灯機が映し出す影のように、君たちの目の前に、ただ、影のみが映し出されているだけかもしれないね」

「そんな馬鹿な！ だってぼくの手は、今、確かに先生の体に触れていますよ」

「触覚や嗅覚も含んだ影なのだとしたら？ 世の中には、そんな幻だつてあるのかもしれない」

「……」

「というわけで、ぼくが、この時代から四十年前の世界へ持ち帰れるのは、脳の中の記憶だけなんだな。だったらぼくは、それを最大限に利用して、新月くんの運命を好転させてやりたい。どうしても、ぼくの手で完結できない運命にある作品ならば、ぼくはそれを、他の誰でもなく、新月くんに仕上げて貰いたい。その新月くんに任せられないのなら、他の誰にも書いて欲しくはないんだ」

室井先生は、おれの両手を掌で包み込んだ。じつと、瞳を見つめながら言った。

「君が、一読者として、ぼくに結末を書いて欲しいと思う気持ちはよくわかる。ありがとう。とても嬉しいよ。だったら、こうしようじゃないか。君が、もし《新月版》を見つけてくれたら、ぼくは、自分で構想している『赤砂の都市』の結末を、君だけにこっそり教えてあげる。君はそれを筆記するなり録音するなり、好きにするといい。それが本探しに対する、ぼくからのお礼代わりだ」

「……わかりました。それでいいのなら——。でも、内容を読むだけなら、どこかで借りるだけでもいいんじゃないやありませんか？ 安齋さん、国会図書館には、もうあたったんですか。『赤砂の都市』は一般の書店に出回った本です。国会図書館に、蔵書として保管されていると思っんですが」

「図書館なら、おれも真っ先に調べたよ」と、安齋さんは

言った。「だが、駄目だったんだ。確かに『赤砂の都市』は、あそこの蔵書として保管されている。しかし、肝心の書き下ろし部分が——つまり、野村新月の書いた後半部分だけが、ごっそり欠落しているんだ」

「落丁か何かですか」

「いや、『切り抜き』だよ。どこかのマニアが、必要な部分だけを、ごっそり破いて持ち帰ってしまったんだ。公の図書館ではよくある話だ。有名な漫画家の初期作品が載ってる雑誌なんか、よく、この手の被害に遭うらしい。手塚治虫の漫画が載ってる雑誌なんか、ひどいことになってるらしいぞ」

「じゃあ、地方の図書館は」

「大きな図書館の目録は片っ端から調べた。が、『新月版』はどこにも見あたらない。だからあとは、絶版本や、いっふう変わった品揃えの古書店を探したほうが、見つかる可能性が高いと思う。図書館の廃棄品として、古書市場に出回っている可能性もあるしな。君に頼むのは、そういう事情があるからなんだよ」

翌日から、おれは、全力投入で『赤砂の都市』を探し始めた。

安齋さんは、全国に散っている友人・知人に同じ依頼をしており、今この時にも、多くの人間が同じ本を探し求めている筈だった。

おれの担当は、阪神地方一円の古書店と、数年前から擡頭してきたインターネットでの古書取引をチェックすることだった。マニア向けの専門古書店を一軒ずつあたり、室井作品のファンを自称する人間に話を聞いてまわった。古書販売のサイトをこまめに巡回し、EasySeek等に探求本を登録した。ネットオークションの書籍カテゴリも、毎日欠かさずチェックした。

安齋さんは、知人を経由して、水原藤雄という書評家とアポイントメントを取ろうとしていた。水原藤雄は、SFや幻想小説の書籍データベースを作成していることで有名な書評家で、自宅に膨大な蔵書を持っている。ここを訪ねれば、まず間違いなく、該当の本が見つかるのではないかと考えたのだ。

安齋さん自身は水原先生とは面識がなかったので、人づてに話を通して貰った。だが、データベースに記載があったにも関わらず、新月版『赤砂の都市』は、そこには存在

しなかった。そのことに一番驚いたのは、水原先生本人だった。

「お訊ねの本は、確かに、わたしの書庫で保管してました」と、水原先生は、困惑しきった様子で答えたという。「少し前に書庫の掃除をしましたが、その時に手に取った覚えもあります。しかし、誰かに貸した覚えはありませんし、そもそもわたしは、滅多なことではこの本を貸さないのです。うちにあるものは、わたしが小説史を書くための、貴重な資料ですから」

電話で事情を聞かされたおれは、安齋さんに訊ねた。「その紛失も、マニアの仕業でしょうか？」

「いや、いくら何でもそれはないだろう。水原先生は、信頼できる人間以外は、絶対に書庫へ入れないそうだから」

「だとしたら、先生自身が、どこかへ置き忘れたとか？」

「有り得んね。あの先生の本に対する愛情の深さは、生半可なものではないよ。とりあえず、もう一度、よく調べてみると言ってくれたから、先生とは、今後も何度か連絡を取り合うことになるだろう」

まるで、誰かの手によって意図的に遠ざけられているかのように、おれ達は《新月版》に辿り着くことができなかった。おれはふと思った。宇宙に存在する何らかの意思が、過去の歴史が変わることを許さず、室井先生の手に《新月版》が渡るのを、阻止しようとしているのだろうか？

おれ達が走り回っている間、室井先生は、のんびりと二十一世紀の生活を楽しんでいた。安齋さんの奥さんは、この、どこからともなく出現したレトロな人物のことを全く不審がらず、店に来る客同様に、にこやかに対応した。室井先生も奥さんの性格が気に入ったのか、煎茶と瓦煎餅などごちそうになりながら、とりとめもなく世間話などしていた。猫好きの室井先生は、トラ猫のジエイムズのこと、文字通り猫可愛がりした。

おれは、室井先生がこの時代で得た知識を元に、自分の時代で「予言者」や「インチキ占い師」になったりしないか気になったが、どうやら、その心配はなさそうだった。室井先生は、安齋さんのパソコンをいじってインターネットの世界を覗き見たり、カラープリンターの印刷精度に大興奮したりしていたが、いずれも好奇心に満ちた子供のような邪気のない喜び方だった。

安齋さんが、それとなく聞き出したところによると、現在の室井先生の年齢は五十七歳。つまり――。

「先生の自己申告を信じるならば、先生が心不全を起こす日は、あと二ヶ月後だ」

二人きりの時、安齋さんは、おれにそう教えてくれた。

「それが、こちら側でも二ヶ月後に起きるのか、向こう側の時代で二ヶ月後のことになるのか、それはわからん。だ

が、最悪のことを考えて、大急ぎで本を探すにこしたことはない」

「先生自身は、そのことを？」

「多分、知っているだろうな。雑誌のバックナンバーを調べればわかることだし、インターネットで検索をかけても出てくるし。だが、おれには何も言わないで、この時代を楽しんでいるだけだ」

安齋さんは、珍しく溜息を洩らした。「だから、未来の知識で元の時代の人たちを翻弄しようなんてことは、これっぽっちも考えてやしないだろう。元々、そんな小賢しい真似をして喜ぶ人でもないしな」

「病院で検査して貰ったらどうです。四十年前ならともかく、今なら、いい薬があるんでしょう」

「健康診断なら、もう受けさせたよ。適当な理由をつけてね。ところが、異状なしだとき。病気が見つからない以上、心臓の薬を貰うわけにはゆかないんだ」

おれは時空の悪戯をうらめしく思った。こんな死の直前の室井先生ではなくて、もっと若い頃の室井先生が扉の向こうから訪れていたなら、おれたちには、もっとたくさん時間が残されていただろうに。

「でも、先生は飄々としていますね。自分が二ヶ月後に死ぬとわかっていて、あんなに、のんびりできるものでしょうか」

「さあな。記録によると、先生は、自宅でひとりでいた時に発作を起こしたことになっていてから、元の時代に帰った時、その行動を変えるつもりなのかもしれないな。それこそ、当日、病院へ行くつもりなのかも。医者目の前で倒れば、多少は、最初の処置が変わってくるだろう。そうやって、自分の運命を変えるつもりなんじゃないかな」「それだといいいんですが……」

どこを回っても手掛かりがなく、現物も見つからないままに、日々は過ぎていった。

おれは安齋さんや室井先生のためだけに本を探しているわけではないので、《新月版》が見つからなくても、古本屋には通い続けた。友人から頼まれている探求本が何冊もあるからだ。

店主と顔馴染みの小さな店から、チエーン店型の大型店舗まで、気分転換を兼ねているいろと回った。

新古書店の百円均一の棚では、値打ちのある絶版本を数冊見つけた。インターネットのオークションに出品すれば、何千円にもなる代物だ。迷わず購入して、店を出る。

高架下に並ぶ小さな古書店をまわり始めた時、おれは一軒の店で、見覚えのある人物と顔を合わせた。

三十代の初め頃に見える、背の高い男。肩からさげた緑色デイパックには、カワセミのワツペンが縫いつけられて

いる。最近、おれが、あちこちの古本屋で見かけるようになった人物——『カワセミ男』だ。

おれは、さりげなくカワセミ男の側へ近づいた。今日はどんな本を買ってゆくのだろう。また、推理小説だろうか。だが、男の手元を見た途端、おれはシヨックを受けた。彼が持っていたのは、おれが長い間探していた、短編ミステリのアンソロジー集。勿論、絶版本。しかも彼は、それを完揃いで手にしていた。おれより一足先にここへ来て、全五巻が並んでいたのを素早く発見したらしい。このシリーズは、前回ここへ来た時には棚になかったのだ。

悔しさのあまり呻き声を洩らしそうになった。この店の標準価格を考えると、そう高い値がついていた筈はない。男がレジへ向かうと、おれは本棚を見るふりをしながらレジの側へにじり寄った。売値を確かめるために。

「二千五百円です」

店番のおばさんの言葉に、おれは愕然とした。欲しがっている人間に転売すれば、バラでも一冊三千円、初版で完揃いなら三万以上で売れる本だ。それがたったの二千五百円！

男はデイパックに本を詰め込むと、悠然と店を出ていった。

おれ自身は何の収穫もないままに、ガックリしながらそこを出た。

手の立っている場所にある本の背を確認することができない。だから、先へ進んだ客は、あとでもう一度同じ場所に戻って、本棚をチェックし直すことになる。

はつきり言って、これでは二度手間なのだ。

カワセミ男のとった行動は、その二度手間を解消するための最良の方法だった。本棚の前ですれ違う際には、二人で同時に動く——つまり、お互いがお互いの体の幅ひとつ分先へ進めば、角度が開いて、途切れることなく本棚を見続けることができるのだ。この方法だと、あとで同じ棚に戻らなくて済む。

おれが古本屋通いを始めた中学生の頃には、どこの古本屋へ行っても、こうやって道を譲り合っている大人たちがいたものだ。古本屋に通う人間は、誰に教えられることもなく、他の客の態度から、自然とその方法を学んできた。だが、今では、こんなことを知っている人間も、めったに見かけなくなってしまった。カワセミ男は、おれと同様にそれをまだ知っている、珍しい種類の人間だったのだ。

何だか、少しだけ嬉しくなった。さきほどアンソロジー集を横取りされたことも「まあ、いいか」という気分になつてきた。

——だが勿論、同類を見つけた嬉しさと、本の蒐集とは別問題だ。

おれは店をそつと抜け出すと、少し先にある、もう一軒

の古本屋へ先回りした。カワセミ男に先を越されないために。幸い、そこでは、絶版のSFの文庫本を一冊発見することができた。これも、出すところへ出せば定価の十倍にはなる本だ。迷わず買って、次の店へ走った。

歩道を駆けていると、肩からかけたデイパックが揺れて痛かったが、そんなことに構ってはいられなかった。このあたりは古本屋の密集地だ。どこで再会してもおかしくない。その前に、自分の欲しい本は全てチェックしておかなければならない。

だが、おれたちは早くも、次の店でもう一度顔を合わせるようになった。

向こうも、先回りしてきたのだった。

こちらに向かつて一瞥を投げると、カワセミ男は、ハードカバーの棚にびったりと張りついた。おれは文庫本の棚へまわり、素早く探求本をチェックし始めた。文庫本の棚の端には、さきほど見つけたのと同じシリーズのSF文庫があった。SFミステリとして名高い古典的名作作品だ。嬉々として手を伸ばした瞬間、横からさつと手が伸びてきて、その本をかつさらった。

かつとなつて相手の顔を見ると、それは紛れもなくカワセミ男だった。相手も嫌そうな顔をしていた。故意におれの邪魔をしたわけではなく、偶然、先に奪う形になったことに、少々困惑しているような表情だった。

「すみませんが」と、おれは、思い切って言ってみた。「それは、ぼくの買いたい本なのです。何とか譲って貰えませんか」

「それは、困る」男は、ゆっくりと答えた。一語一語、噛み締めるような喋り方だった。「先に手をつけた以上、買う買わないは、ぼくの自由だ。申し訳ないけど、譲るわけにはゆかない」

「見つけたのは、こちらのほうが先です」

「そんなことは証明不能だろう」

「何だとお?!」

「ちょっと、お客さん」レジの前に座っていた、古本屋のおやじが声をあげた。「店の中で喧嘩されちゃ迷惑だね。やるなら、外でやってくれないか?」

これは喧嘩じゃない、ただの奪い合いだ! と言ってやりたかったが、騒ぎを大きくしたくなかったので、おれは、「外で待っている。値段の交渉をしたいから」

とカワセミ男に告げて、一足先に店を出た。

銀杏並木の下でしばらく待ったが、カワセミ男は出てこなかった。悠々と店内を物色し続けるばかりで、ちらりともこちらを見ようとしなかった。

どうやら、こちらが金額を上乗せしても手放す気はないらしい。本気で待っている自分が、だんだん、阿呆のように思えてきた。腸が煮えくり返るような気分を噛み締める

がら、それでもおれは、あと一分、あと一分とねばって、木枯らしが吹く道路でカワセミ男を待ち続けた。

彼はKingfisher——まさに、あのデイパックの上に縫いつけられた鳥のような男だ、とおれは思った。樹上から水中の魚に狙いを定め、一直線に飛び込んで、巨大な嘴で獲物をかっさらってゆく、カワセミのような男。

携帯電話の着信音が鳴った。かけてきたのは、安齋さんだった。

《喜べ、幸田くん。新月版『赤砂の都市』を見つけた人がいるぞ》

「本当ですか?!」

嫌な気分がいつぺんに吹き飛んだ。「どこにあったんです?」

《おれの知り合いが『エビス古書倶楽部』で見かけたそうだ。ショーケースの中に展示してあったらしい》

『『エビス』ですか。ちよつと値が張りそうですね』

《うん。まあ、どうしても折り合いがつかないようなら、あそこのオヤジに、結末部分を朗読させるって手もあるがな。もつとも、タダでは読んでくれんだろうがね。とにかく、一度、店に行って交渉してくれないか。カジさんは、電話では取引に応じない人だから》

「幾らぐらい用意すればいいんです」

《値札がまだついていなかったそうだから、下手に交渉す

ると、ふっかけられるかもしれないが……。まあ、八十万を越えることはないだろう」

「いきなり言われても、そんなには用意できませんよ」

「君に用意しろとは言わんよ。明日、うちへ資金を取りに来て、それから店へまわってくれ。カジさんは、今日『エビス』にいないんだ。『Toy Show』に、レア物のフィギュア・セットを持ち込んで出店中だ」

「会場で捕まえられませんかね」

「無理だろうな。あの人はマーケットに出た時には、知り合いと一緒に、あちこち飛び回っているから」

「わかりました。じゃあ、明日の午前中、そちらへうかがいます」

「頼んだぞ」

「はい」

(4)

《エビス古書倶楽部》は、大阪のミナミ——難波・戎橋筋の近くにある店だ。本来は、絶版ミステリや絶版SF、有名漫画家の初版本などを扱っているのだが、その他、映画のパンフレットやポスター、アニメ関係のムック本、カード類やフィギュアまで、その時々流行物全般を取り扱っている。本棚と玩具箱を一緒くたにしたような店で、店内の照明も明るく、見ているだけでもそれなりに楽しい。

店主の鍛原^{かじはら}さんは、おれより十歳年上の中年男性だ。安齋さんや同業者達の間では「カジさん」の呼び名で通っている。まだ若いのに、形の良い頭には一本の髪の毛もない。剃っているのではない。生えてこないのだ。

おれが店に入ると、カジさんは会計カウンターの後ろで、アルバイトの青年と一緒に、段ボール箱を開けているところだった。茶色い箱の側面には、有名菓子メーカーのロゴマークと、玩具付き菓子類の名前が大きく印刷されている。カジさんはおれを見つけると、

「おう、久しぶりやないか」

「こんにちは。どうです、売れていますか」

「さっぱりやな。何か買っていてくれんか」

「値段によりますよ。こちらもねえ」

おれは、ショーケースの中をちらりと見た。赤っぽい表

紙のハードカバーが、京極夏彦のサイン色紙の隣に置かれている。間違いない。新月版『赤砂の都市』だ。

値札は、今日もついていない。

いきなり訊ねることはせず、おれは、何気なく店内の古本を見て回った。おもだった棚にはほとんど入れ替わりがなかった。カジさんはどうやって暮らしているのだろうか、ひとごとながら気になった。ここは古本屋なのに、チョコレートのおマケを完揃いで売ったり、限定版のフィギュアにプレミアをつけて売るほうが今は儲かるのだろうか。裏側へまわると、絶版SF本の棚の前で、ハヤカワの銀背を鋭い目つきで凝視している中年男性と出会った。値段の高さが気になるのか、それとも探しているものがなくて、それでも諦めきれずに立ち尽くしているのだろうか。

男の背後をそっと通り抜け、会計カウンターへ戻った。カウンターでは、アルバイトの青年がスナック菓子のオマケ・フィギュアを一つづつ開封し、シリーズの一覧表と照らし合わせているところだった。

カジさんは値札を作りながら、嬉しそうに呟いていた。

「このインコは可愛いな。カエルも、本物みたいやなあ」

おれは声をかけた。「鍛原さん、このショーケースの中の本なんです」

「どれ？ 水木しげるの初版本？」

「いや、そうじゃなくて、『赤砂の都市』です」

「君、室井龍星なんか読んでるんか」

「昔からのファンですよ。全部読んでるわけじゃないけど。これ、値札ついてませんか?」

「ああ、それなら、もう売却済み」

「へ?」

「何日か前に話がついてな、あとは、支払い待ちの状態や」
「そんなー!」

おれは、へなへたと脱力しそうになった。恨みがましく言った。「売却済みなら、どうして、未だにショーケースに置いてるんですか」

「そうやって置いておくと、もつと高い値で買うと言いだす客がおるかもしれんからな」

「お客さん同士で、競り合わせるつもりですか」

「こつちも商売やからな。高く売れるに越したことはない」
カジさんはそう言って、にやりと笑った。

その時、店の扉が開いて、デイパックを担いだ背の高い男が入ってきた。カウンターのほうを見て、ちよつと頭をさげる。「こんにちは。お金、持ってきました」

「おう」と声をあげると、カジさんは、おれのほうへ向き直った。「幸田君、このお客さんがそれを買ってくれた人や。最近若い奴の間では、室井龍星なんかが流行つとるんか?」

おれは客の顔を見た途端、あつと声をあげた。向こうも

声をあげて飛びすさった。おれたちは同時に叫んでいた。

「カワセミ男！」

「あんたは、あの時の……！」

おれたちは無言で睨み合った。

先に口を開いたのは、カワセミ男のほうだった。

「……代金は消費税込みで四十万。それでよかったですよね、鍛原さん？」

「四十二万！」と、おれは叫んだ。「こちらは外税方式で払います。それでどうですか？」

カジさんは「ふーん」と言って笑った。そしておもむろに、本心とは微妙に違う言い方で言葉を続けた。

「幸田君。いくら顔馴染みやというても、一旦、他の客と話がついてる商品を、わしの一存であんたに譲るわけにはいかん。商売は信用第一や。筋は通さんとなあ」

「では、四十二万では？」

「……」

「四十五万だったらどうですか、鍛原さん？」

カジさんは、唸り声をあげながら、わざとらしく天井をふり仰いだ。くそっ、このタヌキおやじめ。もう一声かけようとした時、カワセミ男が、カジさんの前へ札束を叩きつけた。

「馬鹿ばかしい。ここはオークション会場じゃないんだ。代金は払いました。本は貰ってゆきますよ」

「ちょっと待った！」と、おれは大声をあげた。「今、新しい取引が成立しつつあるところなんだ。邪魔をしないでくれないか」

「おれは、札びらさえ切れればどんな本でも手に入ると思っている蒐集家が嫌いだ」カワセミ男はぴしゃりと言った。「金で全てが解決するのなら、誰が毎日のように古書店を巡り歩く？ 古本探しの醍醐味は、いかにして他人よりも早く本を発見するにかかっているんだ。今おまえがやっているのは、最低のやり方だ」

「まあまあまあ」と、カジさんが割り込んだ。「二人ともそう興奮せんと。新月版が欲しいってことは、あんたたち二人とも、結末部分を読むのが目的なんだろう？ だったら、買ったほうが買えなかったほうに、そこだけコピーしてやったらええやないか。まあ、コピー代ぐらいは負担させて」

「お断りですね」と、カワセミ男は言い捨てた。「コピーなんか取ったら本が中割れして傷んでしまう。こんな奴のために貴重な本を傷つけるわけにはゆきませんよ」

「なんだとおっ！」

カジさんが大声で制したが、おれたちは、もう次の瞬間には揉み合いになっていた。つかみ合いが殴り合いになりかけた時、はずみで、カワセミ男の左手がカウンターの上进行を難いだ。『赤砂の都市』は勢いよくはじき飛ばされ、床の上へ滑り落ちた。と同時に、おれは突き飛ばされた勢い

でよろめき、利き足を大きく右へ踏み出していった。そして、おれのスニーカーは、床の上の『赤砂の都市』を、しっかりと踏みつけてしまっていた。

「うわあああっ！」

カワセミ男が叫び声をあげて床にはいつくばった。おれの右足を凄まじい勢いで払いのけ、両手で本を拾い上げた。頬の赤味が徐々に増してゆく。『赤砂の都市』の表紙には、スニーカーの裏の畝々とした模様が、くつきりと刻み込まれていた。

店中に怒号が響いた。「何てことをしてくれたんだ。これは人に渡すために探していた本なんだぞ。せつかく美品で見つけたのに、どうしてくれる?!」

「うっ……」

おれはさすがに言葉に詰まった。頭上から、カワセミ男の発する罵詈雑言が雨あられと降ってきた。それだけでは気がおさまらないのか、カワセミ男は、おれの体を掴んで激しく揺さぶり始めた。カジさんが間に入って引き離してくれなかったら、おれは本当に殺されていたかもしれない。「ええかげんにせんかつ」と、カジさんが一喝した。「ここは酔っぱらいの溜まり場やない。他の客の迷惑になることはやめてくれ」

「でも、これじゃ気持ちがおさまりません」と、カワセミ男はまくし立てた。「それともこうなった以上、本の代金

を値引きして貰えるのかな。鍛原さん、この人は、あなたの知り合いなんでしょう。責任とって貰えませんか。五万円ぐらいキャッシュバックしてくれたら、考えてみてもいいですよ」

カジさんの表情からたちまち血の気が引いた。「なんちゆうことを言うんじゃ」

全くその通りだ。このタヌキおやじに現金払い戻しを要求するなんて、カワセミ男は根性が座っている。

「ちよつと待ってくれ」

おれは、襟元の乱れを直しながら言った。「……わかった。悪かった。申し訳ない。謝って済むことじゃないが、お詫びはきちんとするよ。おれの知ってる古本屋のオヤジが本の修復技術を持っているから、タダで修復して貰えるようにかけあってみよう。勿論、腕前は保証する。それで、何とか勘弁して貰えないか？」

カワセミ男は、一瞬、虚を突かれたような表情になった。が、すぐに元の表情に戻って、「——まさか、騙して取り上げるつもりじゃないだろうな」

「だったら、修復には、あんたも立ち会えばいい。ただし、時間がかかるだろうから、帰るのは遅くなるけどね」

「遅くなるのは構わない。おれは車だから」

「じゃあ、ちよつと待っててくれ」

おれは携帯電話で安齋さんに連絡を入れた。手早く事情

を説明した。

安齋さんは電話の向こうで言った。

《現物を見ないと正確には答えられないが、その程度なら、何とかかなりそうな気がするな》

「簡単な作業なんですか？」

《まあな》

「室井先生でも、できるでしょうか？」

《多分な。おれが側についていれば、まず間違いは起こるまい。——ああ、何も言わなくてもわかってるよ。君は、先生と本が接触する機会を作りたいんだらう？ 修理代をタダにしてやるから、読ませてくれとか何とか》

「さすがですねえ」

《君が考えつく程度のことなんか誰にだってわかるさ。そっちこそ、悪意にとられないように気をつけて行動するんだぞ》

おれは、カジさんに店内を騒がせたことを詫びると、カワセミ男を連れて《エビス古書倶楽部》を出た。

名前を知らないのは話しにくいので、おれはまず自分から名乗り、それからカワセミ男に本名を訊ねた。彼は工藤と名乗った。

工藤が駐車場に置いていたオデッセイに乗り込むと、おれは《しおり書房》の位置を道路地図で教えた。すると工

藤は、

「《しおり書房》なら知ってるよ。前にも行ったことがあるから」

「じゃあ、店主の安齋さんとも知り合いなのか？」

「いや、個人的なつきあいはないよ。全集を一度買ったことがあるぐらいだな」

《しおり書房》に着くと、奥の畳の間で、安齋さんと室井先生が待っていた。卓袱台の上には作業用の白い和紙が敷かれ、修復のための道具一式が並んでいた。工藤が足跡付きの『赤砂の都市』を差し出すと安齋さんは、

「ああ、これぐらいなら大丈夫、すぐに綺麗にできるよ」と答えた。

作業を見学させて貰っていいでしょうか、と、おれが訊ねると、安齋さんはそれも承知してくれた。おれたちは卓袱台の隣に座って、安齋さんと、室井先生の手元を見守った。

「無理に擦ったりしないで、そのまま持ってきて貰えたのが良かったね」

室井先生はそう言いながら、まず、表面の土埃を丁寧に払い落とした。それから柔らかな布に書籍専用の液体クリナーを含ませ、足跡のついた箇所を丁寧に拭いていた。本の紙質を痛めないで汚れだけとる特殊な液だ。慌てず、余分な力を入れず、ゆっくりと汚れを落としてゆく。四十

年前に発刊された本は、新刊本とは比べるべくもなく古びていたが、二人は、我が子を撫でるように、それを大切に扱った。

最初は不安げな表情をしていた工藤も、次第に、深い尊敬の念のこもった目で室井先生と安斎さんの仕事ぶりを見つめるようになった。だが、目の前にいるのが、本物の室井龍星だということまでは、さすがに気づいていないようだった。

作業が終わった時、工藤の怒りはすっかり解け、冷静な人物の顔が戻っていた。

「ありがとうございます、本当に助かりました」

「いや、これも仕事のうちだからね」と、室井先生が言った。「こちらこそ迷惑をかけたようで申し訳ない。約束通り、修理代はこちら持ちにしておこう。そのかわり、ちょっと、お願い事を聞いて貰ってもいいかな」

「何でしょうか」

「君が見ている前でいいからね、この本の結末部分だけを、ちよつと、読ませて欲しいんだ。ぼくはこの作品を途中までしか知らなくて、長い間、最後にどうなるのか、ずっと気になっていたんだ。そんなにかからないと思うから、少しだけ時間をくれないかな」

「その程度のことでしたら、どうぞ遠慮なく。ぼくは、ここで待っていますから」

「すまないね。ありがとう」

室井先生は、修復が終わったばかりの『赤砂の都市』を手にとった。感慨深げに表紙を見る。それからページを繰って自分の筆による部分を飛ばし、新たに書き加えられた部分を読み始めた。おれは何となく緊張してしまい、それにつられて、工藤も真剣な面もちで先生の手元を凝視した。張りつめた空気を崩したのは、トラ猫のジェイムズの鳴き声だった。ジェイムズは「にやあ」と鳴いて工藤の側へ寄ってゆくと、ブルージーンズの裾を激しくひつかき始めた。「おや、気に入られたね」

安齋さんが、にやりと笑って言った。「そいつはおれに似てきまぐれなんだ。自分から見たことのない客に寄ってゆくのは珍しいな」

「まるつきり見たことのない客でもないんでしょう?」とおれは言った。「何度かこの店へ来ているそうですよ」

「ははあ。そういうえば、そのバッグのカワセミには見覚えがあるな。君は以前うちで、乱歩全集の完揃いを買ったことがあるんじゃないか?」

「そうです。よく覚えてらっしゃいますね」

「守備範囲はミステリー? 室井龍星の本はどうして集めているの。古典SFにも興味があるのかい」

「室井龍星の本は、人から頼まれて集めているんです。ぼく自身は、復刻された数冊しか読んでいません。新月版は、

ぼくが、プレゼントとして人に渡すために買ったものです」

「あげるって、こんな高価な本を？」

「いろいろお世話になった方なんです」

「でも、何十万もする代物だよ。プレゼントにするには、少々、値が張りすぎてやしないかい」

「もう高齢の方ですし、病気で身体を悪くされていますので——。一日でも早く買ってあげたかったです」

安齋さんは腕組みをして俯いていたが、ふと顔をあげて工藤に訊ねた。「もし間違っていたら申し訳ないんだが、君の知人というのは、もしかしたら、野村新月本人じゃないかね？」

えっ！！ と、おれが大声をあげたのを、安齋さんは穏やかに制した。

工藤も目を丸くしていた。「どうしてわかったんです？」
安齋さんは答えた。「新月版『赤砂の都市』の件で、おれは水原藤雄先生と何度か連絡を取り合っている。それで最近、他からもこの本に関する問い合わせが入ったことを聞かされた。その人物は野村新月の知り合いだと名乗り、彼のために新月版を探しているのだと答えた——。その話を、ちよつと思ひ出したものでね」

「仰る通りです。ぼくは新月先生のために、新月版『赤砂の都市』を探していたんです。水原先生のところへ電話をかけたのもぼくです。理由を説明すると、少し長くなりま

すが……」

安齋さんがぜひ聞きたいと言うと、工藤は、少しづつ事情を語り始めた。室井先生も読む手を休め、話に耳を傾けた。

工藤は少し前まで、虫垂炎で市民病院に入院していたのだという。腹膜炎を併発して大変だったそうだが、幸い、大事には至らなかつた。だが、入院生活の退屈さにはまいつてしまった。そこで自宅から大量の未読本を取り寄せ、毎日のように読むようになった。

彼の病室は大部屋で、野村新月とはそこで知り合ったという。だが、最初、工藤はその人物を新月とは知らなかつた。「新月」というのはペンネームだし、野村という姓もありふれている。枕元の名札に書かれた「野村行雄」という文字を見ても、そんなことは想像もしなかつた。工藤は、新月の本名を知らなかつたのだ。

新月は、工藤の右隣のベッドに横たわっていた。肝臓と膵臓を悪くしており、七十歳という年齢を勘定に入れても、ひどく痩せ衰えていた。工藤の目から見ても、明日何があつてもおかしくないような様子だった。だが、新月は工藤が古い時代の空想小説を読んでいるのを見ると強い興味を示し、自分から声をかけてきた。その時工藤が読んでいたのは、室井龍星の長編小説の復刻版だった。

『……室井龍星とは懐かしいね。今の若い人でも、そんな本を読むのかい』

『他の人のことは知りませんが、ぼくは好きですよ。ほんとはミステリーのほうが好きなんですけど、室井龍星の作品は、冒険小説の一種だと思って読んでます』

『でも、今の小説と比べると、ずいぶん古くさいだろう？』

『最近は、こういう作品が結構ウケたりするんですよ。レトロ・フューチャーっていうのかな。古くさいところも含めて、何か、懐かしい感じで落ち着くんですよね』

新月は、何とも嬉しそうに表情を綻ばせた。それ以降、工藤に向かつて、いろんな本の話をするようになった。昔の作品だけでなく、最近のベストセラーまで完璧に読み込んでいる彼の読書量に工藤は驚嘆した。自分と同じ本の虫を見つけた喜びに震え、退院までの間、毎日のように本の話をした。その勢いは同室の患者が「二人の会話がうるさいので部屋をかえてくれ」と、詰め所の看護婦に訴えるほどに、熱のこもったものだった。

退院は、無論のこと、工藤のほうが先だった。新月は、口にもそ出さなかったがひどく淋しげで、工藤は病室を去る時、またお見舞いにきますからと言わずにはいられなかった。

一階の受付で入院費を支払っていた時、工藤は、新月の妻と出会った。何度か顔は合わせていたが、二人きりで話

をするのは初めてだった。工藤が退院の挨拶がてら、新月の本好きには勉強させられたと言うと彼女は、

「うちの人は本のことしか頭がないような人ですからね。何でも若い頃は作家の真似事なんかしていたんですけど、あんまり聞かない名前ですから、きつと、たいした作家じゃなかったんでしょねえ」

「何ていう筆名だったんです」

「新月っていうそうですよ。野村新月。不景気そうな名前でしょう。『満月』のほうがよかったのにねえ」

そう言うって老齡の奥さんはコロコロと笑ったのだが、工藤のほうは仰天した。名前しか知らないとはいえ、野村新月は、室井龍星の関連書には必ずといつていいほど名前の出てくる作家だ。もし自分の知っている野村氏が新月本人だとしたら、自分は、大変な人と話をしていたことになる。工藤は冷や汗を流した。病室での楽しい会話の中で、工藤は何度も、室井龍星や野村新月に関して、しゃあしゃあ と批判的なことを口にしていたからだ。

挨拶もそこそこに、工藤は病室へ飛んで帰った。そして、奥さんの言ったことが本当だったと知った。

だが、新月は、自分が作家扱いされることをひどく嫌ったという。ただの本好きの老人でいい、そのつもりでこれからもつき合って欲しい、と強く要求した。工藤は、それでも何となく落ち着かなかった。そこで、何か望みがあつ

たら遠慮なく言って下さい、と告げた。それは、彼流の礼儀の払い方だった。

すると、新月は答えた。

「そうだな。じゃあ、お言葉に甘えて、室井先生の本を可能な限り集めて貰うことにしようかな。いや、新刊でなくていいんだ。わたしは金持ちじゃない。だから古本で充分だ。なるべく古い時代のものを——原本に近い形で収録されている本を、少しづつ、集めて貰えないかな？」

現在、新月が室井龍星の本を一冊も持っていないことを、工藤は不思議に思った。が、人は様々な理由から蔵書を手放す。立ち入ったことは聞かず、彼はその日から室井龍星の本を探し始めた。

工藤の持っていたシリーズは、復刻版なので代表的な二・三作しか収録されていない。だから、探さねばならない本はたくさんあった。工藤は、新しい本を見つけるたびに病院を訪れ、それを新月に手渡した。新月は室井本と再会するたびに目を細めて喜び、次に工藤が訪れるまでに、何度も読み返しているようだった。

室井龍星の本を探しているうちに、工藤は『赤砂の都市』に、《新月版》と呼ばれるヴァージョンがあることを知った。だが、その話題を出すと、新月は笑いながら、

「その本だけは探さなくていいよ。あれは今思い出しても恥ずかしい、若気の至りのようなものだから」

と言うだけだった。本人がそう言うのなら、工藤も納得すべきだった。が、彼はあえて逆らった。新月版の内容を知る人から「そう悪くもない作品だ、むしろ、もっと評価されてもいいだろうな」などと聞かされると、黙って見過ごす気にはなれなかった。知り合いのツテを通してコピーを読ませて貰ってからは、その確信をますます強めた。当時の評論家や読者の評判が何だ。自分はこれをひとつの作品として面白く思う。それを新月にわかって貰いたい。そう考えて、《新月版》を、強引にプレゼントすることに決めたのだ。

「多分、新月先生は、もう長くはもたないと思います」

と、工藤は言った。

「ずいぶん高齢ですし、病気も進行しておられるようですから。だからぼくは、一日も早く、この本を先生に渡したかったのです。ここに一人、この本を面白がった人間が確かにいるのだということを伝えて、安心して貰いたいです」

室井先生が言った。

「……工藤くん。わたしを、その病院へ連れて行ってくれないか。わたしも新月先生に会ってみたい。この本を読んだ感想を、ぜひともお伝えしたいのだ」

工藤は、少し躊躇するような様子を見せた。当然だろう。

今日会ったばかりの赤の他人を重病人に面会させるなんて、普通だったら許しはしない。

すると室井先生は、たたみかけた。「新月先生に、君の他にもファンがいることを知って貰いたいんだ。手間はかけさせないよ」

「……わかりました。では、日にちと時間を決めましょう。短い時間なら、都合がつくと思います」

数日後、室井先生は、工藤と一緒に病院へ行つた。

おれと安齋さんは留守番を命じられていた。室井先生が、「ぼくは、新月くとふたりきりで会いたいんだ。これは、ぼくたち二人だけの問題だからね」と言ったからだ。

新月先生は病状が悪化し、個室へ移っていた。

工藤は病室で両者を二人きりにし、自分は廊下で待つことにした。だから、直接には二人の会話を聞かなかつた。後日、彼は新月先生の口から、感謝の言葉と共にその時の様子を知らされたという。その話と、後に、室井先生がおれたちに話してくれたことを総合すると、以下のような感じになる。

工藤から室井先生を紹介された時、新月先生は、それが誰なのか全くわからなかつたという。工藤が病室を出たあとも、新月先生は、ぼんやりと室井先生を見つめているだけだつた。そんな彼に、室井先生は自分から正体を明かし

た。

「ぼくですよ、新月くん。室井です。お互い、歳をとったものですね。君がぼくよりも年上になってしまいうなんて、時間旅行というのは、何て酷いものなんだろうね」

普通の人間なら、この言葉だけでは何のことやらさっぱりわからなかっただろう。だが、空想小説を書いていただけあって、新月先生の直観力は、瞬時に鮮やかな働き方をした。理屈抜きで、目の前にいる人物が、本物の室井龍星であることを理解したのだ。

新月先生の瞳に、たちまち強い光が戻ってきた。

「先生……。室井先生なんですか。本当に先生なんですか。まさか、こんなところでお会いすることになるとは……」

「ああ、そのまま、そのまま。無理に起きなくてもいいから、そのまま聞いてくれ」

だが、新月先生は上半身を起こし、背に枕をあてがってもたれかかった。「いや大丈夫。もう治りました」

「相変わらず律儀だねえ。仕事のほうは、今、どうしてるの」

「何とか書くことで食っています。ほとんど無名に近いのですが、仕事は、まだあります」

「……今でも、野村新月の名前で？」

「いいえ。先生が亡くなつてからは複数の筆名を使い分けて——あ、いや、本人を前にして『亡くなった』は変で

すね」

「いいよ。どうせぼくはこの時代では、空気がみたいな、幽霊みたいな存在なんだから。でも、別名義というのは、また、どうして？」

『野村新月』という名前は、空想小説を書く時だけに使おうと思って、置いてあるんです。結局、その名前を使う機会は、もうなさそうなんですけどね。別名義になってからは、いろんなものを書きましたよ。中間小説、ミステリー、エッセイやら書評やら、文章と名のつくものは何でも請け負いました。ホラーや官能小説なんかも手がけましたよ。あれは描写の勉強になりますな。純文学に挑戦したこともありました。ごく短い作品を、二・三度、載せて貰ったきりですがね。おかしなものでね。空想小説だけを書いていた頃には、それが世界で一番美しくて面白いジャンルだと思っていたんですが、毛色の違うものを書き始めると、どうにもそちらも面白い。わたしは気が多いんでしょうな。だから大成しなかったんでしょうな。それでも振り返ってみれば、わたしなりに、充実した人生だったような気がします」

「そうか。だったらぼくが、これ以上言うことは何もなさそうだね」

新月先生は、にっこりと微笑んだ。それは本来ならば、室井先生が決して見る筈のなかった、老成した弟子の姿だ

った。

室井先生は、紙袋の中から、新月版『赤砂の都市』を抜き出して言った。

「新月くん。ぼくが今日ここへ来たのは、これのためです」

新月先生の顔から純真な笑みが消え失せた。代わりに、ほろ苦いものが混じった笑みが広がる。新月先生は掛け布団のうえで、両方の掌を、せわしく握ったり開いたりした。「最後まで、読ませて貰いました」

と、室井先生は言った。「まさか、こんな終わり方になっているとは思わなかった。思い切ったことをしたものです
ね」

「お恥ずかしいことです」新月先生は、片手で頭をかきながら言った。「若い頃の過ちのようなものです。本当に、申し訳ありません」

「いや、ぼくは感謝しているんです。この締めくくり方は、ぼくの読者の中には納得しない人もいたことでしょう。でも、これは紛れもなく、ぼくの中にある傾向のひとつです。それを大切に結晶させてくれた君には、やはり、お礼を言うべきでしょうね。ありがとう、新月くん。でも、これじゃあ、酷評も出ただろうね」

「ええ、まあ、多少は」

二人は顔を見合わせた。そして、静かに笑い合った。

新月先生は続けた。

「わたしはこの本を、誰よりも先生に読んで頂きたいと思っ
ていました。誉められなくても、自分の未熟さを怒られ
ることになっても、それでも、もう一度、先生とお会いし
たかったのです。だって先生は、あんなに急に、いなくな
ってしまったじゃありませんか。もう一度、先生の声を聞
きたかった。わたしの頭の中では、あの楽しかった日々が、
いつも繰り返し響いていた。先生の声と姿が消えなかった。
それがわたしに、一生、小説を書き続けさせたのです」
「そんなことを聞かされると、何だか、罪作りなことをし
たような気になるなあ」

「いえ、気にしないで下さい。本物の先生と、わたしの中
にある先生とは、似て異なるものですから」

新月先生は、穏やかな表情に戻って続けた。「ずっと、
もう一度お会いしたいと思っていました。それがこんな形
で叶うなんて、人生、捨てたもんではありませんなあ……」
それから二人は、長い間、思い出話にふけた。おかげ
で工藤は、病室の外で何時間も待たされることになった。
けれども、中で交わされているに違いないあたたかい会話
のことを思うと、長い待ち時間が、少しも苦にならなかつ
たという。

それに、本好きの彼は、常に鞆の中に未読本を入れてい
たので、時間潰しは、いくらでもできたのだ。

「それでは、ぼくは、そろそろ元の時代へ戻ります」

病院から《しおり書房》へ戻り、おれたちに一部始終を聞かせてくれると、室井先生は帰り支度を始めた。

「自分のためにも新月くんのためにも、しなければならぬ仕事が山積みです。当分、書齋にこもりきりですな」

「また、いつでも遊びに来て下さい」と、安齋さんは言った。「この書庫は、わたしと幸田くんしか知らない、秘密の場所ですから」

「ええ、また寄らせて貰いますよ。仕事の合間にね」

先生がそのまま帰りそうになったので、おれは慌てて声をかけた。「先生。あのう、あの約束は……」

「約束？ 何か、約束してたっけ？」

「はい。ぼくが新月版を見つけ出したら、先生の構想していた『赤砂の都市』の結末を、こっそり教えて頂けるといふ約束でした。あれは、どうなったんでしょうか」

「ああ、すっかり忘れてた。ごめん、ごめん」

悪気はなかったのだろうが、室井先生は、本当に忘れていたようだった。先生がもう一度座布団に腰をおろしたので、おれは、ICレコーダーのスイッチを入れた。

室井先生は話し始めた。

「ぼくが構想していた結末は、火星人たちが星を渡る船を

完成させて、若い世代を、地球へ送り出すという終わり方だ。太古の地球へ辿り着いた火星人たちは、文明の曙を迎えたばかりの地球人たちと交流することになる。火星人たちは神とも悪魔とも呼ばれ、時には地球人と結婚しながら、世界中へ拡散してゆく。そこから、地球の神話と伝説に絡めた、新しい物語を始めるつもりだった。この物語は火星だけで終わるんじゃないかと、舞台を地球へ移して、大河シリーズになる予定だったんだよ」

「じゃあ、新月先生の書いた結末とは、随分、隔たりがあったんですね」

「うん。だが、新月くんが書いたものは、あれはあれで、ぼくが考えた結末の一つなんだ」

「どうしてですか」

「新月くんの書いた結末は、ぼくがデビュー直後に書いたものの、ボツをくらって未発表になっていた作品のラストを流用したものだ。実は、その原稿が『赤砂の都市』のベースになっているんだが——新月くんは、ぼくの遺稿を整理していて、そいつを見つけたんだろう。彼なりに感銘を受けた部分があって、それを『赤砂の都市』の結末として利用したんだな。つまり、新月くんは、あの作品の結末を、自分の感性で創作したわけではない。室井龍星という作家の書いた過去のテキストの中から、最も相応しいと思ったものを、相応しい形で嵌め込んだだけだ。彼はあの作

品に関しては、奥ゆかしくも、優秀な編集人として働いただけなんだよ」

「そんな！ だったら新月先生は、どうして、そのことを皆に発表しなかったんです。先生の作品だとわかっていたら、ファンも評論家も納得したでしょうに！」

「言っているよ。言っているじゃないか。彼は、ぼくの遺稿と資料を基に結末をつけたと言ってたのだろう？ 新月くんがそう言ったら、それは彼が勝手に創作したという意味ではなくて、本当に、元になるものがあつたという意味なんだ。それを誤解したのは、一部の評論家と熱狂的なマニアだけだ。否定的な意見だけが一人歩きするようになったのは、全く、不運だったとしか言えないね。まあ、きちんと説明しなかった新月くんも悪いんだが——彼流の遊び心というか、ちよつとした悪戯のつもりもあつたんじゃないかな。原典があることを伏せておいた時、皆がどういう反応を示すか、確かめたかつたのかもしれないな」

安齋さんが横から訊ねた。「——偉大な作家の全ては処女作に集約されている……と言いますが、新月先生も、それにならつたということなんでしょうかな？」

「さて、どうだろうね。自分の気持ちを優先できれば彼は満足だったのでしようが、世間を甘く見ていた部分があつたことはやはり否めない。結果的に、彼は、負うべきものを負つたのだと思います。そこから先のことは、ぼくが口

を差し挟むべき事柄ではない。……ただね、ぼく自身は、あの結末を読んでいて単純に嬉しかったんですよ。どこかにいなくなってしまうた子供が、突然、元気な姿で戻ってきてくれたみたいだね」

先生は卓袱台の上に両手をつき、ゆつくりと座布団から腰をあげた。

おれたちは二階へあがり、異次元書庫へ入った。時空を越える扉の前で、室井先生は、もう一度礼を言った。

「今度は、ぼくの時代に遊びに来て下さい。歓迎しますよ。ぼくの時代の珍しいものを、いっぱい見せてあげます」

おれたちは、ぜひお願いしますと答えた。扉は静かに閉まり、室井先生の姿は、向こう側に消えた。

その直後、扉そのものに異変が現れた。書棚の背板にくつきりと刻まれていた輪郭が、徐々に溶け崩れ、扉としての形がなくなり始めたのだ。

おれは慌てて扉に飛びついた。ノブを両手で掴み、必死になって手前へ引っぱった。だが、扉はまるで沼に沈んでゆくように、背板の中へ吸収されてゆく。ノブは濡れた魚のようにおれの掌からすり抜け、扉と共に書棚の背板へ溶け込んだ。書棚の中へ埋没してゆく扉を、おれたちは、呆然と見守るしかなかった。消える、消える。何もかも、消えてしまう――。

「行かないでくれ！」

と、おれは叫んでいた。扉の向こうには室井先生が待っている。おれたちの訪問を楽しみにしている。扉がなくなったら、その約束が果たせない――。

だが、扉とノブは、急速に書棚と同化していった。やがて書棚の背板から、過去の世界と繋がる通路は、完全に姿を消し去った。

目の前が暗くなり、足元がぐらりと揺れた瞬間、安齋さんにポンと肩を叩かれて、おれは正気を取り戻した。

おれは、安齋さんに訊かずにはいられなかった。「ぼくたちは、もう室井先生に会えないんでしょうか。永遠に……」

安齋さんは、静かに首を横に振った。微笑みを浮かべながら、言い切った。

「あの扉は、ある日突然、この書庫に出現した。だから同じようなことがまた起こっても、決して不思議ではない。信じて待とう、幸田くん。いつかまた、ここにある書棚の一つに、もう一度、室井先生の書齋へ繋がる扉が現れるさ。そいつは必ずやってくる。やってくるに、違いないんだ――」

室井先生が元の時代へ帰ったあと、安齋さんは、新月先生に頼んで、新月版『赤砂の都市』の結末を確認させて貰った。

その本は、過去が書き変えられたと思われる現在では、

死の直前の室井先生の遺言によって新月先生に草稿が手渡されたこと、新月先生は、その草稿を基に《新月版》の結末を仕上げたこと——が、最初のページに明記されていた。

そして、ラストは、こんなふうになっていた。

変異生命体を滅ぼした火星人たちは、やがて、環境に適応して火星に残ることを選んだ者と、星を渡る船で宇宙へ新天地を求める者とに分かれてゆく。彼らは双方、生き延びるために何某かの大切なものを失うことになる。環境に適応することを選択した者は火星人としての元の身体を、宇宙へ旅立つことを選んだ者は慣れ親しんだ自分たちの故郷を。だが、彼らに後悔はなかった。それが未来を掴むことなのだと言っていたからだ。旅立つ者たちは空から、見送る者たちは地上から、お互いの幸運を祈りながら去ってゆく。情感に溢れたラストシーンは、もうすでに、作者が誰であるかということを超えて感動的だった、と安齋さんは言った。

が、実はおれたちは、このラストが元の新月版と——つまり、過去が変わる前と変わった後でどう違っているのか、今では、全く指摘することができない。この新しいと思える結末が出現した途端、おれたちは一人の例外もなく、以前持っていた新月版に関する記憶（そういうものがあつたような気がするのだ）を、きれいさっぱり失ってしまった

らしいからだ。

これは、いったいどういうことなのだろうか？　これが、過去が書き変わるといふことなのか？　史実だけ見るならば、特に変化した部分はなさそうな気がする。室井龍星という作家が『赤砂の都市』の執筆途上で急逝し、野村新月が結末部をつけたし、評論家と読者の間で賛否両論が巻き起こり、野村新月の書き足した結末があつたほうがいいのか無いほうがいいのか、未だに決着がつかないまま現在に至っている――。この事実のどこかに、以前と違う部分はあるのだろうか？　誰か、知っている人がいたら、教えてください。過去が書き変わるには膨大なエネルギーが必要で、何かがそのために、おれたちの記憶の一部を、エネルギー源として消費してしまったということなのか？

手元にそれを証明するものは何もない。ICレコーダーの中身もからっぽだ。おれはここに、何を録音していたんだっけ？

そんなことを考えていると、あの扉の向こうから室井先生がやってきたこと自体が、今となつては、ただの白昼夢であつたようにすら思えてくるのだ。たくさんの人間がいちどきに見た、大きな白い幻。

だが、それでもおれは確かに覚えている。丸っこい先生

の顔と体、掌の分厚さ。椅子に座り、書棚の前に立ち、畳の間で本のページをめくっていた真剣な表情、軽妙でいてゆったりと響く滑らかな低い声。何よりも証拠として残った、サイン入りの先生の本。もつとも、それを誰かに見せても、本人が書いたとはとても信じて貰えないだろう。おれは迂闊にも、復刻版の新しい本に先生のサインを貰ってしまったのだ。その奥付は、当然のことながら先生の死後の日付になっている。あとで訊いたら、安齋さんもちやんとサインを貰っていたそうだが、勿論、こちらのほうは時代を合わせて古い本にサインして貰っている。古書市場に出せば百万近くの値がつく筈だが、安齋さんは、きつと一生、この本を手放さないに違いない。

新月先生は、その後、個室を出て大部屋へ戻った。室井先生と会ってから妙に元気を取り戻し、医者が驚くほど病状が良くなってしまったのだという。桜の花が咲く頃には退院するかもしれないという話を、おれたちは聞いた。それが、自宅で逝くための措置ではないことを、おれたちは切に祈っている。

水原先生のところの『赤砂の都市』は、遊びに来た孫が、自分の家へ持って帰っていたことが判明した。蔵書を持ち出されたことを、水原先生は怒るべきなのか喜ぶべきなのか大いに迷ったという。資料を勝手にされるのは困るが、自分の孫が空想小説のファンになってくれることは、やは

り嬉しいのだ。

カジさんは相変わらずだ。古本よりも、フィギュアの陳列と販売に情熱を傾けている。

工藤とは、今でも時々古本屋で出会う。スーパーマーケットに勤めている彼は、職場の配置変えで、おれの休みとかち合うことが多くなった。相変わらず、狙っている本が重なったり、百円均一のワゴンの前で睨み合ったり、百貨店の古書市で奪い合いになったりすることがあるが、以前のような拘りはもうお互いにならない。

おれたちは古本屋で会っても、これといって特に挨拶をすることはしない。ましてや「ちよつと、そこでお茶でも」などと言って、世間の垢にまみれたような、ベタベタしたつき合いをすることもない。

それでも彼は、今でも、古書店の棚の前ですれ違ふ際には、さりげなく通り道をあけてくれる。おれも同じようにして道を譲る。

そうやって、心の隅で、ちよつとだけ相手のことを気にかけながら、お互いに古本探しを続けるのだ。

(了)

著者紹介

梶崎由梨 (Yuri Kanzaki)

<http://www.sf-fantasy.com/magazine/novelist/y-kanzaki.shtml>

作品紹介

http://www.sf-fantasy.com/magazine/novel_1/muroi/index.shtml

著作：書棚の育て方

http://www.sf-fantasy.com/magazine/novel_s/kanzaki/shodana.html

緑の家路

http://www.sf-fantasy.com/magazine/novel_s/kanzaki/green.html

ウツホの像

http://www.sf-fantasy.com/magazine/novel_s/kanzaki/utuho.html

業火の炎

むろいせんせいのしょさい
室井先生の書齋

2002年1月12日 第1版第1刷発行

著者 梶崎由梨 (Yuri Kanzaki)

発行人 中条 卓

発行所 アニマ・ソラリス

URL <http://www.sf-fantasy.com/magazine/>

制作 松谷 和加子 (電脳工房りっくらっく)

表紙 三上 央子 (電脳工房りっくらっく)

本書の文章及び図面、イラストに関しては一切の無断転載を禁止させていただきます。
希望される場合はメール (master@sf-fantasy.com) にてご相談ください。